

# 新『教会通信』(2019年6月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

◎『この教会は彼(主イエス・キリスト)の<sup>からだ</sup> 軀にして、  
<sup>よろず</sup> 萬の物をもて <sup>よろず</sup> 萬の物に満し給う者の<sup>み</sup> 満つる所なり。』

(エペソ書第1章23節)

教会とは如何なるものか、どのような所なのか、聖書が示す真の教会と社会一般が通常捉えている教会の認識とでは、何処がどう異なるのか、聖書を通して学んで参ります。

新約聖書は、主イエス・キリストが此の地上に顕現なされて以来の活動と神の国に付いての語りが記され、更に十字架に由る贖罪の後に誕生した初代(使徒時代)教会での出来事等を示した書巻であります。

初代教会は、或る時を境に永きに亘って中断致します。

しかし、主のご再臨を間近に控えた末の時代に、初代教会の復興したる教会が出現するとの預言は成就し、我らの教会はその中に在ります。

使徒時代の教会が中断した、とは何を以て言うのか?

聖霊(御霊)降臨が、途絶えて仕舞ったからであります。

二世紀後半(人に依っては三世紀)には、聖霊が降らなくなったと言うのが歴史(教会史)上の事実であります。

なぜ、聖霊が途絶えて仕舞ったのか?

厳しい律法を聖典としたユダヤ教に比して、新時代の教会には御霊の自由の許に銘々の献身的働きがありましたが、やがて霊の働きがともすれば自己主義と結びつき、本来の教会の秩序を乱し、教会の徳を立てるよりも信徒個人の気儘を助長させる結果になったと思われれます。

そこで教会は、その組織や制度を確立した物に発展させる事に迫られ、結果、聖霊の働きを封じる傾向になり、テモテ書(前第3章)やテトス書(第1章)に、教会には監督・長老・執事など役員が置かれた事、及びその資格や職分にも詳細な規定が設けられており、それまでの霊の賜物を戴く者達の自由な献身とは異なって参りました。

テモテ前書第1章3節以降11節迄に、律法への回帰思想が忍ばれます。

またヨハネ第一書第2章24節では

◎『初より聞きし所を汝らの衷に居らしめよ。初より聞きしところ  
汝らの衷に居らば、汝らも御子と御父とに居らん。』

サタンはあらゆる偽預言者達を、真の教会の中に送り込んでおります。

ペテロ後書第2章1節以降、及びヨハネ第一書第4章1節以降に偽預言者、偽教師が異端を持ち込んでいる記述が記されており、取り分けヨハネ第一書第4章1節以降◎『凡ての霊を信ずな。キリストが肉体にて顕れた事を言い表す霊は神から出ており、言い表さぬ霊は非キリストの霊である。』

しかし、グノーシス(知識)派の二元法を持ち込んだ彼らは、“神は霊であり善である、肉は悪である”依って、霊であり善である神が、悪である肉体を以て顕現する事は有り得ない、としています。

此れ等は初代教会に取って大問題であり、パウロたち預言者は、

◎『御霊を消すな、預言を蔑すな、凡てのこと試みて善きものを守り、  
凡て悪の類に遠ざかれ。』 (テサロニケ前書第5章19節～22節)

と、その危機感を以て叱咤しております。

改めて『御霊を消すな』と叫ばねばならない空気が教会内に顕れ、預言を蔑ろにする現実が其処彼処に顕れて来た現実が窺われます。

故に、神様は聖霊をお留めなされたのでありましょう。

同時に、古いカトリックの教理が芽吹き始めた時期であります。

真の教会としては長期に亘る暗黒の時代(空白の時代)であり、初代教会に示された聖書の真理は大きく歪められて、その間にカソリックだのプロテスタントだのと聖霊(イエス之御霊)の御働きを抜きにした肉的解释の教理・神学が横行する事となります。

しかし、終末をいよいよ間近に控えた千九百年頃から、後の雨としての聖霊が再び求むる者に降り注がれて参りました。

神が認める真の教会は、イエス之御霊(聖霊)の存在と御働きを抜きにしては有り得ません。

嘗ての使徒時代には、一般の家屋に於いて集會が営まれており、是は家の教会(コリント16:19等)と呼称されておりますが、聖霊を戴く者達の集まりでありますから神の教会・真の教会であります。

ローマン・カソリックの如き建築物の超大きさや絢爛豪華な装飾などに、神の偉大な祝福と働きが有るやに思われる世の中でありますが、我らの神が新約聖書に於いて定義なされる教会は、水と霊のバプテスマ(ヨハネ3:5)を頂戴し、霊と真を以て神を崇める礼拝を為す者達の集まりを“教会”としておられます。

イエス之御霊を戴く者が二三人以上集う所が、神の教会であります。

聖書全体の聖言を神の御旨とする我らの教会を、主イエス様は御自身の躰である、としており、又その躰の上の首(頭)は主イエス様ご自身であられる、とエペソ書第1章22、23節に記しておられます。

つまり我らの教会は、神と一体であり、躰を支配なされる首のお導きに依って、時に前進し、時に後退し、時に右左折し、時に止まると言う信仰生活が常道であり、主の祝福と恩寵と深い深い憐憫は絶える事なく、我らを神の子として此の地上に在って天国の心地を与えて下さいます。

教会を委ねられている牧師は、主イエス様の承認の下に立てられた器であり、ヨハネ傳  
第3章34節

◎『神の遣わし給いし者は神の言をかたる、  
神、御霊を賜いて量りなければなり。』

御霊を崇める教会の集会で御用を為す牧師は、御用を為すに当たって御霊の禱り(異言)を以て神に祈願し、用いる聖言と語る言葉(自国語)を与えられて説教を致します。

牧師としての私の体験では、説教の内容が講壇に上がって始めの祈禱の中に突然、変更の導きを受ける事も珍しくはありません。

そのような説教の後には、語らされた牧師自身が始めて教えられる事が多く、主イエス様の聖名に感謝し平伏すばかりであります。

重ねて申し上げますが、人が御救いに与る為の神のお導きは、“水と霊”(ヨハネ3:5)のバプテスマを受ける事であります。

また一度此の御救いに与った者から脱落者が出ない為に、サタンや世俗的な誘惑に惑わされて、信仰からの決定的な脱落に至らないようにと、神様ご自身が二重三重に保険を懸けて下さっておられます。

#### ヨハネ第一の書第2章1節

◎『人もし罪を犯さば、我等のために父の前に助け主あり、  
即ち義なるイエス・キリストなり。』

#### ロマ書第8章33, 34節

◎『誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。  
誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは  
神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。』

神は自省を促す必要のある者に対して、試練を与えられます。

次の聖言に、その神の御旨が示されております。

◎『されど審かるる事(試練の意)のあるは、  
我らを世の人と共に罪に定めじとて、主の懲しめ給うなり。』

コリント前書第11章32節の聖言は、神の子が主の試練に遭う理由として、神を知らぬ世の者達と同じレベルで最後の大審判に裁かれないように、との主のご慈愛深きご配慮である事が示されております。

また霊讃歌百番の三番目♪我が罪いかに深くとも、主は我が衷に住み給う、と聖霊様が内住して下さっている限りは、大丈夫と言えます。

上記の如く神の御憐憫を聖書に依って識る事は、信仰の幅と奥とを深めるのに大切な事ではありますが、かと申して、そこに甘えて何をやっても構わないと言うものではなく、主が大概の事は赦すが、言葉を以て聖霊を瀆したり逆らう罪は此の世にても後の世にても赦さない(マタイ12:31, 32)、と仰有っておられます事を肝に銘じて置くべきであります。

此の世に於いても後の世に於いても赦さ無い、と言う主イエス様のお言葉を信仰の

最重要課題として、各自心に秘めて措かねばなりません。

神に対する思念の中に、敬虔の籠が緩んだり外れたりして参りますと、我らが一番大切にしなければならない神の霊“聖霊様・御霊様”を軽く観て仕舞い、初代教会の如くに神のご不興を買う事になり、今度は当事者個人が裁かれる事になります。

故に神の深きご配慮である試練に遭った時、素早く神のお怒りに気付き、内省と行動を以て主の御前に遜る事の出来る者は幸いです。

神の義の前には、誰一人として過ちの無い者はおりません。

◎『まことに汝らに告ぐ、

もし汝ら翻えりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。

されば誰にても此の幼児のごとく己を卑うする者は、

これ天国にて大なる者なり。』

(マタイ傳第18章3, 4節)

神様の御前にどれ程、自らの我を折る事が出来るか？

神様の御前にどれ程、己が恥を厭わずして素直に成れるか？

大人は如何にも知識人ぶって、彼も此もと考え保身や言い訳を謀ります。

神のお言葉を素直に聞き入れる者は、神の歎び給う幼児であります。

◎『汝は神のことを思わず、反って人のことを思う。』

(マタイ傳第16章23節後半句)

国籍を天に持ち(ピリピ3:20)、神の家族の一員としての肩書きと永遠の生命を賜っている自分を誇りとして、日常生活を送っている我ら聖徒に取って一番大切な事は、実は己に死んで神の中に生きる事であります。

上記マタイ傳第16章23節に続く24節以降

◎『人もし我に従い来たらんと思わば、己をすて、

己が十字架を負いて、我に従え。己が生命を救わんと思ふ者は、

これを失い、我が為に己が生命を失う者は、之を得べし。

人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、何の益あらん』

此の聖言は、主イエス様が、ご自分がユダヤ教の長老・祭司長・学者らから多くの苦しみを受け、かつ殺され、三日目に甦る事をお弟子達に語られた事に対して、使徒ペテロが「そんな事は止めて下さい」と言った事への主のご返答であります。

つまり、主イエス様が十字架にお掛かり為される事は、天の父なる神様との間で決められた事であり、譬え使徒ペテロの人情味溢れる思いから発した言葉にせよ、神のお考えに口出ししてはならないと言う事であります。

勿論、使徒ペテロに向かって言われたお言葉ではありますが、後の世の我らに向かって言われた厳しい教訓でもあります。

※『神の子として神の教えに従おうとする者は、自我を棄てて、己が十字架を負いて、

即ち、自ら正しいと思える事であっても神の義の前に己を棄てて、主に従う事こそ

が、自らの永遠の生命を得る事になります。』

※『譬え、全世界を儲けるような話であっても、自分の生命を失ってサタン(悪魔)と同じゲヘナに墮とされる事になったら、何にもならない』と諭して下さっておられます。

◎『神は美麗の極みなるシオンより光を放ち給えり』

(詩篇第50篇2節)

◎『エルサレムの為に平安を祈れ エルサレムを愛する者は榮ゆべし』

(詩篇第122篇6節)

上記二つの聖言に記されたシオンとエルサレムは、それぞれ個別な地名であります、イスラエル国の推移の中にやがて“シオン”はエルサレム全体の呼称として詩篇には多く取り上げられております。

また“シオンの娘”と言え、エルサレムの市民全体の事を指すようにもなりました。(詩9:14 イザヤ1:8 ゼカリヤ9:9等)

更にヘブル書第12章に、出エジプトをしたばかりのモーセが十戒を戴く為に登らねばならなかったシオンの山は、神がご降臨なされて雲が重々しく垂れ込めた火が燃え盛る怖ろしきシオンの山、と表現されております。

その時は、人間は疎か 獣さえもその山肌に触れたら死を蒙ると言われ、モーセすら『われ甚く恐れ戦けり』と言わしめた地名でありましたが、いま我らは、そのシオンの山、天のエルサレムと呼ばれる最大の祝福された神のご降臨下さる教会に、席を置く身分であります。

我らが崇める神は唯一、旧約も新約も同じ神であります。

我らが現代の真の教会に所属し、真の御救いに与って日々御霊の祝福の導きの中に活かされております此の情 況は、人間がエデンの園を放逐されて以来、最大の幸せな情 態と言えましょう。

信仰とは、自分と神様との関係である、と多くの者が単純にそう思って仕舞い勝ちであります、上記の聖言では、そこに教会が無くてはならぬ大きな存在として関わっている事が教えられます。

つまり上記聖言の“シオン”と“エルサレム”は、現代、聖霊を崇める真の教会の代名詞であり、従って、詩篇第50篇2節では

※『神様は、美麗の極みである教会から祝福を発信しておられる。』と成り、教会を抜きにしては祝福を得られ無い事になります。

また詩篇第122篇6節は

※『教会が何事も無く穏やかである事を祈りなさい。教会を愛する者は、神様が特別にお恵み下さり、凡ての事の上に榮えて参ります。』

教会を愛する信者でなければ、神様の方が相手にして下さいませぬ。

教会の頭は主イエス様で、その躰である教会は信者である貴方が参加して構成されており、貴方が居なければ成り立ちません。

さて、貴方は教会の中でどのような役割を為さってお出でですか？

為すべき事を何時までも重荷として捉えているのでは無く、神の子としての成長の過程で自発的に感謝の真心を以て行う事が出来たら、神様もお喜び下さいます。

例えば、神様への仕一や感謝の献金の事であります。

マラキ書第3章7節から10節までをご拝読下さい。

◎『わが殿に食物あらしめんために汝ら仕一をすべて我が倉に携え来たれ』(10節上半句)とありますが、神の殿・即ち今の教会であります、神の教会が教会としての機能を果たすのに必要が十分に賄える為に、とあり、此処にも喜びと感謝を以て為さいますと、その10節の下半句◎『わが天の窓を開きて容るべき所なきまでに恩澤を汝らに注ぐや否やを見るべし』と成って参ります。

もしも、神への献げ物をする事を厭い人間的欲得から怠る者が有るとせば、その8節◎『ひと神の物を盗むことをせんやされど汝らは我が物を盗めり』『汝らはまた何において汝の物を盗みしやと言えり十分の一及び献げ物に於てなり』続くその9節◎『汝らは呪詛をもて詛わる』

さて、神に対する凡ての行為は口先だけでは無く、心のこもった愛が伴わなければ本物ではありません。

教会には何か困った時にだけ行けば良い、そう思っているような信者も居ない訳ではありませんが、御救いに与って間もない者ならば兎も角、五年十年経っても成長の跡が見られない者には、神は試練を与えてその者の信仰の成長をご覧になられるでしょう。

それでも尚、教会の存在を自分に取って歓喜と感謝の場所であると認識出来ない者には、御霊を蔑する者として遺棄されて仕舞うかも知れません。

冒頭の聖言を今一度拝読して、締め括りと致します。

◎『この教会は彼(イエス・キリスト)の躰にして、  
萬の物をもて萬の物に満し給う者の満つる所なり。』

(エペソ書第1章23節)

此の聖言を正しく理解される為に、エペソ書第1章20節に遡って拝読して参ります。

◎『神はその大能をキリストのうちに働かせて、  
之を死人の中より甦らせ、天の所にて己の右に座せしめ、  
もろもろの政治・権威・能力・支配、また唯に此の世のみならず、  
来たらんとする世にも称うる凡ての名の上に置き、  
萬の物をその足の下に服わせ、彼を萬の物の上に  
首として教会に与え給えり。』 (エペソ書第1章20節～22節)

いま天の父なる御神は、ご自身が保つ英知・権能・権威の凡てを御子キリスト・イエスに託され、また萬物をそのご支配の下に置くと言う最高権威者としての地位を司らせ、萬物の首(頭)として真の教会にお与えになられておられます。

主の御霊と共に在る我らは、終末と共に先ず空中へと携え挙げられ(テサロニケ前4:15～18)、地上に残された者達の嘗て誰も味わった事の無い怖ろしい大患難の七年間を避けて、主と共に快適に過ごします。

七年の後、一夜にして新装なった地上に降りてきて千年の間、王として祭司として君臨し、最後の審判が開かれる時には、神の子として黙示録第20章4節に黙示録の筆者ヨハネが見た◎『我また多くの座位を見しに、之に座する者あり、審判する権威を与えられたり』とありますが、キリストと共に神の家族の一員とさせられている我らは、神と共に裁きする者の座位に座すのは、当然かと信じます。

更にその後の、ヨハネ黙示録第21章に示された新天新地に在っても、我らは神と永遠に一緒であります。ハレルヤ！

我らの教会は、此等の預言に対する契約が総て整っております。

主よ、来たり給え。主イエス・キリスト様、来たり給え。

願わくは栄光、世々限り無く我らの神にあらん事を、アーメン。

(2019年6月1日 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)